

弘前市立郷土文学館の 5 年間の指定管理を振り返って

弘前ペンクラブは、平成 29 年 4 月 1 日より、弘前市立郷土文学館の管理運営を開始しました。管理運営者は他に T R C、アップルウェブがあります。つまり弘前ペンクラブを加えた三つの団体が共同事業体として、弘前市立図書館及び弘前市立郷土文学館の指定管理者として運営を開始したのです。

T R Cが弘前市立図書館の運営、アップルウェブが広報業務及び地域との連携にかかる事業、当ペンクラブが弘前市立郷土文学館の運営をスタートしたということです。T R Cもアップルウェブも大きな企業であり、専門的な力量も抜群であり、郷土文学館としても心強い限りです。

市民が積極的に、楽しく郷土文学館を利用できる運営体制は、どうあるべきか、という視点を常に意識しながら、日々の業務を遂行して参りました。市民と郷土文学館とが一体化しながら、さまざまな施策を展開し、来場者とスタッフが、ともに達成感を共有できるように努めております。

運営の基本を来館者との交流を一層深めることに置き、学ぶことを通して、市民と一緒に自らの課題を解決し、櫛引洋一企画研究専門官をリーダーに、郷土文学館職員が一致協力して、メインの企画展をはじめ、スポット企画展、北の文脈文学講座、ラウンジのひとつ、文学散歩、無料映画上映会、文学忌などのイベントを開催しております。

幸いなことに県内外からの多くの来場者から好評をいただいております。わけても企画展「太宰治生誕 1 1 0 年記念展—太宰治と弘前—」は観覧者数が 5000 人を超えるほどの人気でした。太宰治はもちろんですが、日本はもとより世界の多くの人たちからも、当市ゆかりの文学者が高く評価され「文学都市・弘前」の称号を得ています。また当市は「太宰治まなびの家」をはじめ、多くのすぐれた文学的遺産を有していることも全国にアピールできる原動力になっています。

残念なことに、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、休館や大幅な人数制限を余儀なくされました。市民の皆さんをはじめ、多くの文学ファンに多大なご迷惑をおかけし、衷心よりお詫びを申し上げます。

さて弘前市をこよなく愛する私たちは、先達の偉業を仰ぎみながら、後世へ継承していかなければならない責務を担っています。その認識のもとに、弘前市立郷土文学館は「文学都市・弘前」の今後の一層の発展のために、全力を尽くす所存です。

弘前ペンクラブ会長 斎藤三千政

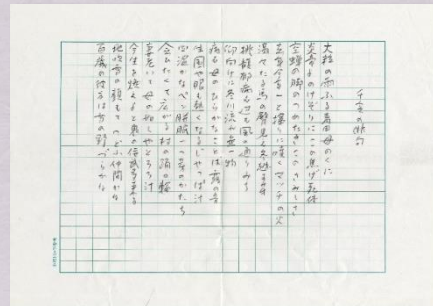
新資料紹介 — 成田千空直筆資料 —

企画展「生誕 100 年 成田千空展」にて未公開の資料や、開催期間中に提供された資料の中から千空直筆の資料を紹介。挙げられている句やその順序などから、千空の講演の内容や意図を想像させられる興味深い資料である。



千空の平成 10 年、「たんしの会」で千空が講演した時の資料原稿。金子兜太、飯田龍太、鷹羽狩行ら著名俳人の代表句が書かれている。

- 「人体冷えて東北白い花盛り」 金子兜太
- 「やませ来るたちのやうにしなやかに」 佐藤鬼房
- 「戦争と暁の上の団扇かな」 三橋敏雄
- など



成田千空の講話「私と俳句」（平成 17 年 9 月 25 日）の資料原稿。「千空の俳句」と題し、自身の代表句が並ぶ。

これらの資料は現在開催中のスポット企画展「成田千空 生誕 100 年—寄贈資料を中心として—」（令和 4 年 2 月 14 日迄）にて展示中

▶お知らせ

- 1月15日 新春ラウンジのひとつき
「平尾鶴朋 薩摩琵琶を弾き、語る」
出演：平尾 鶴朋（薩摩琵琶鶴田流演奏者・錦風流尺八演奏者）
- 1月29日 第8回北の文脈文学講座
「新収蔵資料展」 ※令和3年12月18日分振替
講師：櫛引 洋一（企画研究専門官）

▶ 今後の文学忌 () はロビー展示期間
今官一 3月1日(3月1日~3月7日)
※忌日は無料開館となります。 ※ロビー展示は1階ロビーにて行います。

◎イベントに関するお申し込み、お問い合わせは文学館窓口、またはお電話(0172-37-5505)まで。
◎12月29日~1月3日は年末年始休館となります。



第 45 回企画展 生誕 100 年 成田千空展

記念講演会「成田千空—風土を超えるもの—」

講師：横澤放川氏

(俳句結社「森の座」代表)

第 45 回企画展「生誕 100 年 成田千空展」の記念講演会が 11 月 23 日、弘前市立観光館・多目的ホールで開催された。新型コロナウイルスによる緊急事態宣言の影響をうけて延期となっていたものの開催である。

講師の横澤放川氏は昭和 22 年静岡県生まれ。市川東子房『大櫻』を経て、中村草田男『萬緑』に拠る。『萬緑』最後の選者。後継誌『森の座』代表。『季題別中村草田男全句』などの編纂刊行に従事。俳人協会評議員。超結社誌『件』同人。『兜太 TOTA』編集委員。日本経済新聞俳壇選者でもある。生前の成田千空と交流があり、今回は中村草田男、成田千空の思い出話や句の解説を交えた講演となった。



講師の横澤放川氏

草田男主宰の『萬緑』は、草田男の周辺にいた青年たちが草田男の思いの丈の発表の場を作ってあげたいという一心で創刊した雑誌である。千空は草田男の句に衝撃を受け、当初から『萬緑』に入会し、草田男を終生敬仰した。

千空と同様に横澤氏も草田男の存在を発見、入会。『萬緑』の冊子で目に留まったのが千空の句であり、「声量感」というべき言葉の容量が千空俳句にはあった」と語る。千空が東京を訪れた際は氏と酒を飲むのが恒例で、酒のさかなは俳句の話のみだったが、「大変実りのある多くのことを学ばせてもらった月日であった」と回想した。

昭和 28 年、第一回萬緑賞は大方の予想に反し、草田男の鶴の一声で千空に決定。千空は地方に居ながら『萬緑』のなかで大きな位置を占めていった。草田男亡き後（昭和 58 年）、第四代選者に千空が就任。昭和 63 年から 20 年間、千空の元からいろいろな作家が育っていき、草田男の一番弟子として非常に重要な役割を果たした。「千空が選者をやっていたらこそ『萬緑』が存在する価値がある」と思っていた氏は、千空が亡くなった時『萬緑』を終刊するつもりでいたが猛反発され、金子兜太には「俺の青春を奪う気か!」と怒られたという。

兜太が褒めた千空の句に「野は北へ牛ほどの藁焼き焦がし」がある。千空の持っている「北」の感覚—自分の言葉の根本にある存在根拠、それが何を言われようがびくともしない—その存在感を兜太は感じとっていた。

草田男俳句には「津軽行」（『銀河依然』昭和 26 年）のような旅吟が多くあるが、名所旧跡を詠う観光俳句とはまるっきり違い、よるこびの中で次から次へ作品が産出されている。千空も草田男同様、一つのものや場所に固まらず絶えず歩くことの中からひとつの「風土の思想」を積み上げていった。それは風土を素材にしているのではなく、草田男の言葉でいうならば「驚きに出会う」。驚きが最初にあり、驚きから一つの俳句作品が生まれる。そこに草田男と共通する千空俳句の出発点がある。

千空俳句の根本には、肺疾などによって奪われた青春の自己否定がある。千空作品はその一旦の自己否定が津軽という風土において媒介され、より高次の詩的次元に達せんとする止揚の努力なのである。「千空俳句の特徴である「風土」は単に風土を素材として詠んだものではない。縦軸に「草田男」（千空が生涯をかけて信じた文学世界）、横軸に「津軽の風土」があるから、作品は総合的、複合的な厚みを帯びてくる。それが最初に述べた非常に「声量豊か」な千空作品の秘密である」と締めくくった。

当日は、たくさんの方にお越しいただき、ありがとうございました。

参加者アンケートより

- ・千空俳句の理解の仕方がわかった。
- ・個人的なエピソードを交えて、千空が身近に感じられた。
- ・兜太の評がなかなか聞き応えがあった。

スポット企画展 中央俳壇と津軽の俳人(二)

会期：令和3年6月26日～8月31日

本展は、明治から大正、昭和へと受け継がれた「俳句革新」の志を、高浜虚子と門下の増田手古奈（大鰐町出身）、中村草田男と草田男を生涯の師と仰ぐ成田千空（青森市出身）、〈師弟二組〉の交流を中心に紹介した。

大正2年、俳壇に復帰した高浜虚子は、俳誌『ホトトギス』を拠点とし、「客観写生」「花鳥諷詠」の理念をもって時代をリードしていく。また、水原秋桜子、阿波野青畝、山口誓子、高野素十（四S）、その後続く増田手古奈、川端茅舎、松本たかし、中村草田男ら、個性的な俳人を輩出した。虚子は、昭和14年5月、同24年5月の二度の来県の際に大鰐を訪れ、句会や吟行など、手古奈の手厚いもてなしを受けた。手古奈は昭和6年1月に東北唯一のホトトギス系雑誌『十和田』を大鰐で創刊。虚子の唱えた「客観写生」の俳句の道を60年以上にわたって広めた。

展示では、虚子宛手古奈書簡の下書き（年不明1月7日付）、手古奈宛虚子書簡（昭和32年12月31日消印）を初公開。虚子と手古奈の交流を伝える貴重な資料となった。



俳誌『十和田』創刊号
十和田発行所 昭和6年1月1日



25日大鰐の折（昭和14年5月）
右が手古奈 一人置いて虚子

昭和4年、中村草田男は虚子を訪ねる。まもなく『ホトトギス』の雑詠欄で川端茅舎、松本たかしらと共に活躍。加藤楸邨、石田波郷らと〈人間探求派〉と称された。昭和21年10月、俳誌『萬緑』を創刊・主宰。草田男は昭和26年8月25日～9月2日の旅程で初来県。その折、数日間におたつて津軽を巡り、「津軽」78句の大作を生んだ。同行した千空は「学ぶべき文学の師」と仰ぐ草田男の、その句作の現場を目の当たりにした。昭和64年、『萬緑』第44巻第1号（千空が選者となって初の号）で「草田男の求めたものを求めながら草田男俳句とはかなり異質な俳句になった感じもする。選もまた草田男の求めたものに沿いながら、私なりの俳句の見方が加味されることになると思う」と、草田男の精神を旨としながらも自らの姿勢で選に臨む決意を表明した。



十和田湖吟行の折（昭和26年8月）
左から草田男（50歳）千空（30歳）

スポット企画展 生誕90年 三浦哲郎展 ー原稿「初心」ー

会期：令和3年10月1日～11月29日

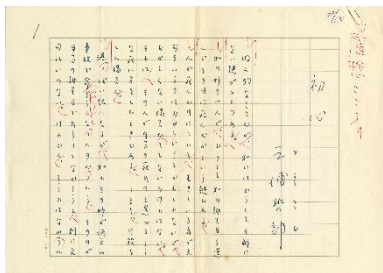
作家・三浦哲郎は、昭和6年3月16日、青森県八戸市に6人兄弟の末子として生まれ、今年生誕90年を迎えた。兄姉の4人が若くして自殺・失踪する悲運に遭うが、その逆境から立ち上がり文学の道を志した。出自・運命の暗さを内に秘めながら、自らの体験を清新な叙情へと昇華させ、昭和36年、小説「忍ぶ川」で青森県初の芥川賞を受賞。人生の哀歓を描いた名作の数々に世に残した。

本展では、三浦哲郎が生涯にわたって追求した問題の原点を綴ったエッセー「初心」の直筆原稿を公開し、そのテーマのもとに書かれた代表的な作品を紹介した。

原稿「初心」は、400字詰め原稿用紙5枚の短いもの。発表誌紙は不明だが、本文に「そんな気持で文筆生活に入ってから、もうそろそろ足掛け十年になる」とある。三浦が八戸市立白銀中学校の助教諭となり執筆活動を始めたのは、昭和25年19歳の頃であるため、三浦が芥川賞を受賞した昭和36年に近い頃の執筆と推定される。

本文は、「私の姉の一人が、どうして私の誕生日を選んでその日に死んだか」という謎から書き起こされている。次姉の貞子は三浦を大層かわいがっていたが、三浦が満6歳を迎える誕生日に青函連絡船から身投げしてしまう。その後も次々と起こる兄姉たちの不幸に、三浦は、自分たちに流れる「滅びの血」を見るようになる。「その血を絶えず意識して、試験管に取って研究するより自分の生きる道はない」。三浦は、郷里の海辺の中学校の宿直室で、「医師がカルテを書くようにして」兄や姉たちの短い生涯を書き始め、やがて本気で文学を志しはじめる。

貞子が遺した〈謎〉に対する答えは、代表作「白夜を旅する人々」の登場人物である次姉「れん」を通して語られる。三浦自身の家族を素材として登場人物に生命を吹き込み、青春を語らせ、人生を再現させた「白夜を旅する人々」には、沈黙したまま自滅していった兄や姉たちへの鎮魂の思いが込められている。



原稿「初心」

無料映画上映会

「天地悠々 兜太・俳句の一本道」

新型コロナウイルスの影響により一か月間の臨時休館となり、11月3日に延期しての上映会となった。

金子兜太が亡くなる直前、最晩年の姿を収めたキュメンタリー映画を上映。平成24年からのインタビューを中心に俳句や生涯を辿りながら、人生、俳句、戦争に対する思いを兜太自身の言葉で語る。俳人・金子兜太の最期の言葉にじっくりと耳を傾けるひとときとなった。

◇参加者アンケートより

・戦争の中でそれを体験、実感したことが心の根っこにあるという言葉がとても鮮烈に思われました。一人の人生としてすごく実のあるものでした。

・人は何かを求めることによって支えられているという言葉が象徴的でした。

・人生が俳句、俳句が人生ということ。戦争体験が後年の生き方を決めたということ。泰然としてしなやかな人と俳句。よく感じる事ができた。

・生きる喜びなど、様々考えさせられ、有意義でした。

弘前市立郷土文学館 開館31周年記念

平成2年（1990）7月1日に開館しました。

日頃の感謝をこめて7/1.2.4の三日間を無料開館とし、多くの方々にご来館いただきました。

◆月刊『弘前』創刊500号記念 全号504冊、一挙展示。



令和3年7月1日～4日
1階ロビーにて 協力：北方新社

月刊『弘前』は昭和54年（1979年）8月1日に創刊、今年3月号で500号を迎えた。創刊当時より、詩人の高木恭造をはじめ弘前の錚々たる文化人が執筆。また小説家・今官一ら当館常設作家の特集も多数掲載された。



1995年3月(第188号) 当館の第6回企画展「高木恭造展」が表紙。書、書簡、絵画など全144点を展示した。

◆ワークショップ 俳句を作って、オリジナル“光るうちわ”をゲットしよう!



ご家族やご友人同士で、展示を観ながらの〈文学館クイズ〉に挑戦したり、完成した“光るうちわ”に満足げな表情や、ロビーに敷き詰められた『弘前』を感慨深く見入っている姿に、楽しんでいる様子がうかがえて、職員一同感謝の念でいっぱいです。ご来館ありがとうございました。

文学忌

当館では令和2年度より「文学忌」と題し、常設作家10人と平成30年に亡くなった長部日出雄を加えた11人をロビーにて特別展示を開催している。展示期間は忌日を含め1週間程度で、忌日は無料開館としている。

展示内容は各人を深く掘り下げたものや、普段は見ることのできない解説員厳選の資料が並ぶ。

また、忌日には時折、弘前文学会による朗読会も行われ花を添えている。



「文学忌」の様子（令和3年 平田小六より）



弘前文学会代表 後藤隆氏



「ことゆらり」による朗読